

神さま、お願い

奨励	井口 智子 [いぐち・さとこ]
奨励者紹介	日本キリスト教団河内松原教会牧師

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、`霊、に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。

「人はパンだけで生きるものではない。
神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』
と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。
「神の子なら、飛び降りたらどうだ。
『神があなたのために天使たちに命じると、
あなたの足が石に打ち当たることのないように、
天使たちは手であなたを支える』
と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。
『あなたの神である主を拝み、
ただ主に仕えよ』
と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

(マタイによる福音書 4章1―11節)

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

(マタイによる福音書 28章20節b)

私が祈る時

昨日は7月7日、七夕でした。あいにくのお天気で、天の川を見ることはできませんでしたが、いろいろな所で「七夕イベント」がありました。七夕笹飾りライトアップという大イベントもあれば、お店や駅で笹と短冊が置いてあり、「ご自由に願い事を書いて笹につるして下さい」としているのを見かけました。それに、家で笹飾りをされるところもあります。我が家でも、子どもが幼稚園の頃は、必ず幼稚園から七夕の笹を持って帰ってきました。色紙で笹飾りを作って笹に飾った記憶があります。皆さんの中にも、七夕イベントに参加されたり、七夕の笹に短冊に願い事を書いてつるされた方もおられるのではないかと思います。

七夕の節句の由来は諸説あるようですが、日本古来からの行事と、奈良時代に中国から伝わった行事が合わさって、星に祈るお祭りに変わっていったと言われているようです。特に笹や竹は、冬でも枯れずに緑のままですし、天に向かってまっすぐに育つ生命力に、不思議な力があると言われてきたそうです。

このような植物（笹）は神聖で神を宿すとも言われたそうです。天に輝く星や天に向かうように伸びる植物に、古代の人は神聖さを感じたのでしょう。

さて願い事です。昨日テレビで、願い事が書かれた短冊が映し出されていました。「全てがうまくいきますように。阪神タイガースが勝ちますように。結婚できますように。家族が健康でいられますように。家内安全・無病息災」と、いろいろな願い事が書いてありました。

私たちは、今回の七夕に限らなくても、神さまに願い事をしたことは、皆さんも一度はあると思います。特に合格の願いをした人は多いのでは、と思います。

私の娘も受験前には、おばあちゃんやおじいちゃんだけでなく、親戚の人からもお守りをいただきました。それを全部机の上に並べて、1個1個に「合格させてください」と、特別信仰心はない娘もお祈りをしていました。

このように信仰のあるなしに関係なく、人は思わず「神さま、お願い」と祈ることがあります。先ほど言ったように、受験、恋愛、仕事、健康、人間関係等、さまざまな願い事があります。それは、その時々の、自分が置かれている状況での願い事なので、人それぞれたくさんあるわけです。

私の祈りが叶う時、叶わない時

さて、先ほど読んでいただきました聖書箇所は、悪魔がイエスを誘惑する内容が書かれていました。

- (1) 神なら、石をパンに変えるよう命じたらどうだ人は、パンだけで生きるわけではな
いけれど、パンがなければ、まず食べなければ健康に生きることができません。皆
さんが生まれた時、きっとお母さんやお父さんは、この子が一生食べることに困ら
ないように、食べて健康に生きていけますようにと願ったと思います。
- (2) 神なら、神殿の屋根の端から飛び降りたらどうだ
皆さんが生まれた時、きっとお母さんやお父さんは、危険な目に遭いませんよう
にと安全そして無病息災を願ったと思います。
- (3) 悪魔に対してひれ伏して拝むなら、世の全ての国々と繁栄を与えよう
皆さんが生まれた時、きっとお母さんやお父さんは、お金に困ることがありませ
んように、仕事が成功しますようにと商売繁盛を願ったと思います。

これらの誘惑の内容は、悪魔の誘惑となっていますが、健康、家内安全、無病息災、商売繁盛を願うことは、誰でもが普通に思う、普通に祈ることです。決して特別変な願い事では
ありません。

例えばパンを望むことですが、今のこの瞬間も、世界のどこかの地域では、干ばつや自然災害、または紛争の中において、命を脅かされて暮らしている人たちがいます。今、日本に住
む私たちは、干ばつや自然災害、紛争で飢えるほどに食べることに困るということはありません。また、安全についてですが、先日、新幹線放火事件がありました。このような出来事
があると、「私たちはあの車両でなくて良かった。辛い目に遭わなくて良かった。やはり神さまが守ってくださった。ありがとうございます」と、お祈りすることがあります。もちろ
ん日々の生活において、神さまに感謝することは良いことです。しかし、もしもそうではない場合、あの車両にいた人、干ばつや紛争の地に生活している人は、神さまに守られなかつ
たということになるのでしょうか。

もしも自分が願ったようにならなかった時、それは神さまに守られなかったということになるのでしょうか。それとも、神さまに一生懸命に祈っていないということでしょうか。でも
現実として、どれだけ一生懸命願っても、一生懸命祈り求めたようにはならないことが多いです。そんな時、「やっぱり神さまなんていない」と、私たちは思うことが多いのではな
いでしょうか。ここに、私たちの心理が、神さまをどのように捉えているのかが表れています。

私のことをお話しします。私は高校3年生の時、母を病気で亡くしました。いろいろと大変な家庭で、とても苦労した母を見てきたので、母が41歳という若さで死を宣告された時、
私はもはや祈る気力すらありませんでした。神さまにお願いするどころか、「この世には、神も仏もない」と、悲しくて、悔しくて、辛くて、本当に全てを呪いたくなるような日々で
した。

でも、母が発病した時、「神さま、どうか治してください」と一生懸命お願いをして、もしも治っていたら、きっと私は神さまの存在を信じ、感謝でいっぱい気持ちになったと思
います。

つまり、私のお祈りと神さまの存在は、私が神さまをどのように捉えていたかということです。ハッキリ言いますと、自分の都合に合わせていたということです。私は、自分の思
い、自分の都合で神さまの存在を決めていたということです。自分の損得、自分の望みの基準を神さまの存在基準にしていたのです。先ほど災害や事故の話をしましたと同じです。自
分が遭遇するしかないか。あくまでも自分が基準なのです。

私のために祈られた時

母が亡くなる少し前に、私は17歳の誕生日を迎えました。その時、入院中の母から、お誕生日おめでとうと書かれた手紙が家に届きました。母からの手紙は特別な遺言書ではなく、
ごく普通のお誕生日おめでとうの内容で、便箋一枚でした。ところが封筒には、もう一枚の便箋が入っていました。もう一枚の便箋には、お誕生日おめでとうの言葉と祈りの言葉が書
かれていました。ただし、書いた人の名前はありませんでした。母が入院をしていたのは京都のキリスト教の病院、バプテスト病院でしたので、チャプレン（病院付の牧師）がおられ

るので、おそらくその方が書かれたのだろうと思います。もう歩くこともできない母だったので、その方が便箋と封筒を用意して、ポストに投函もしてくださったのだろうと思います。その時に、ご自分の手紙を一枚添えられたのです。でも私はその方を知らないのです。顔すら浮かびません。おそらくチャブレンだろうと思われるその方の手紙、折りだけが書かれた手紙が、私に不思議なことを起こしました。

「母と私がこんな辛い目に遭うなんて、この世に神などいるものか」と思い、悲しくて、辛くて、悔しい思いの私に、不思議なことが起こりました。悲しくて、辛くて、悔しいのに、不思議なことに、嬉しい気持ちになったのです。悲しいのに嬉しい。とても不思議な感覚でした。癒されていく自分がそこにありました。皆さんは、このような感覚がどうして湧いたと思いますか。実は、その時、私は分かりませんでした。それから何年も経ったある時、悲しいのに嬉しいという、とても不思議な感覚、癒されていく感覚が湧いた意味を知りました。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

クリスチャンとなり、聖書の御言葉に触れ、ついに知りました。今日の聖書箇所はマタイによる福音書ですが、マタイによる福音書の一番最後の箇所、28章の最後の言葉に記されていました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」というイエス様の言葉です。

私たちが生きているこの日々、いつも、いかなる時も、この今の瞬間も、イエス様は共におられるということです。イエス様は、一人ひとりの「私」と共におられ、そしてイエス様は一人ひとりの「あなた」と共におられるということです。「共にいる」ということは、「私のために、あなたのために」寄り添ってくださっているということです。悲しみ、苦しみの最中にある私たちに寄り添ってくださるということなのです。

ただし、自分に寄り添ってくださると言われても、特別に声が聞こえるわけでもないし、触って確かめることもできません。では、どうして分かるのかと思いますよね。

イエス様が、一人ひとりと共におられるということは、私たちは、人を通して、イエス様に出会っているということです。イエス様は、人を通して、私たちに具体的に働かれるということです。

だから、私に届いた私へのお祈りの手紙は、その人を通して神さまの力が働いたのです。

「神さまの力が働いた＝母の病気が治った」というわけではありません。どうにもならない状況であるけれど、私のために祈ってくださる誰かがいる。つまり、私の悲しみ、苦しみに寄り添ってくれている人がいる。祈ることすらできないほどのしんどい状況にある時、誰かが、私の代わりに祈り、私のために祈り、私のしんどい気持ちに寄り添ってくれたのです。母の病状は変わらず悲しいのに、嬉しい。そのような不思議な感覚が湧きました。ここに神さまの力が働いているのです。

「神さま、お願い。どうか、〇〇さんをお守りください。」

私たちは、人を通して、神さまに出会っているのです。神さまは、人を通して、具体的に働かれています。神さまは、私たちの都合の良い希望を叶えるためだけに、共におられるわけではありません。私たちは生きていると、どうしようもない、どうにもならない理不尽で不条理な出来事に出会うことがあります。心折れるほどの悲しみ、苦しみ、悔しさに出会うことがあります。神さまはその悲しみ、苦しみ、悔しさに寄り添ってくださるのです。私たちは、そのようなどうしようもない出来事に出会った時、誰かに寄り添ってもらい、誰かから自分のために祈られると、不思議な力が湧いてくるのです。その不思議な力、悲しいのに嬉しくなる力、前を向いて生きる力、それが神さまの力なのです。人を通して具体的に働かれる、神さまの力なのです。

私たちは生きていて、これから先、「神さま、お願い」と何度も祈ることがあると思います。自分のことを祈ってはダメとは言いませんが、「神さま、お願い。〇〇さんの悲しみを、苦しみを、どうか担ってください。どうか、〇〇さんをお守りください」と、祈る人になりたいと思います。

2015年7月8日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録